観峰館所蔵朝鮮古碑拓本について

寺前公基

観峰館は、中国書法文化を伝える資料を多く所蔵している。その中、法帖コレクションは現在、本紀要「収蔵品目録」にて、調査研究成果の公表を継続して実施している。本稿は、従来未紹介であった、三国時代より朝鮮王朝時代までの朝鮮古拓本について、その概要を示したものである。

当館所蔵の朝鮮古碑拓本は、平成二十三年（二〇一一）冬に所蔵が確認されたもので、令和五年（二〇二三）一月現在、六十三種に及ぶことが分かっている。これら拓本の確かな経歴は不明である。しかしながら、各拓本は一種類ずつ紙封筒【図版1】に丁寧に封入されるとともに、同封される付属文書等には、「朝鮮総督府逓信局」の便箋【図版2】や、原稿用紙【図版3】が使用される他、数種類の手紙が含まれている。調査の結果、これらの拓本は、かつて朝鮮総督府に在職した官僚・松島惇氏の旧蔵と判明した。

松島氏は、大正後期より昭和前期にかけて、京城や釜山にて逓信局副事務官、貯金管理局長として勤務している[1]。松島氏が用いた便箋に「逓信局」とあるのは、そのためである。そして、その職務の傍らで、朝鮮半島の貨幣や古代の文化・歴史について研究し、黒井治徳氏[2]との共著を含む、論文六編、さらに、「広開土王碑」永楽六年丙申条の碑文を考察した単著四編を、朝鮮総督府刊行の雑誌『朝鮮』や『考古学雑誌』に発表している。

「華厳経刻石拓本」（朝拓―011）には、松島氏の自筆釈文が多く付属している。これらの拓本及び釈文は、黒井氏との共著「朝鮮智異山華厳寺蔵の経石に就て」（『考古学雑誌』一〇巻四号、一九一九年）にて利用されたものと思われる。そこには、黒井氏より松島氏宛に送られた書簡【図版4】も添えられている。書簡は、朝鮮総督府博物館の所蔵品管理の状況が生々しく語られており、当時の朝鮮半島の文化財に拘わる人びとの貴重な資料といえよう。

前川公秀氏の研究[3]によると、大正四年（一九一五）十一月に設置された朝鮮総督府博物館は、総督府が朝鮮半島で行った古蹟調査で発掘されて出土された遺物が主要な収蔵品となっていた。しかし、文化財の価値が社会的に認知されるようになると、充分ではない保存環境であったため、盗難の被害もあったという。大正十一年（一九二二）六月には、発掘出土品が窃取されるという事件も起こっている。

先の松島氏宛の黒井氏からの書簡は、外部からの盗難を示唆したものではないが、総督府博物館の管理状況の危惧を述べている点で変わりはない。松島氏が、朝鮮半島にある古碑の拓本を蒐集した経緯には、自身の研究目的のほか、朝鮮半島の文化財を守るという意識が強くあったのではないだろうか。

拓本の蒐集方法は、多くは採拓を依頼し購入したものであろう。「孝子孫時揚旌閭碑」（朝拓―０３４）に付属する書簡には、鍾銘四枚、飛天像四枚と合わせて九枚を四円五十銭で購入したとある。

また所蔵品の中には、「葛頂寺三層石塔記」（朝拓―０１０）や「真鏡大師宝月凌雲塔碑銘」（朝拓―０２１）等の拓本が含まれており、いずれも大正十五年（一九二六）三月時には、朝鮮総督府博物館館庭に移設されていたものである。[4] 松島氏がこれらの拓本が蒐集できたことは、総督府関係者である所縁であろう。

さて、観峰館所蔵朝鮮古碑拓本の調査は、所蔵確認の翌年の平成二十四年（二〇一二）十月、「広開土王碑模刻本」（朝拓―００１）の調査を、武田幸男氏に依頼したことより始まる。その成果は、武田氏の論考としてまとめられている。[5]

残る六十二種の拓本の調査は、朝鮮古代史の研究者である田中俊明氏に調査を依頼し、二〇一九年より各拓本の調査を開始した。併せて、作品の撮影や、一部拓本の補修も行った。拓本はいずれも「捲り」の状態であり、裏打ちされたものはなく、このことが当時の採拓状況を示唆するという点でも興味深い。

今号から数回に分けて掲載する田中氏による朝鮮古碑拓本の解説は、これらの調査成果をふまえたものである。

〔注〕

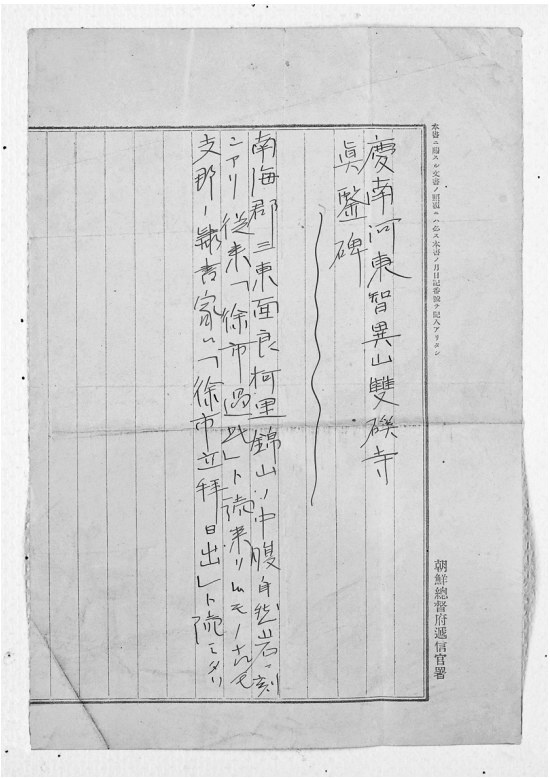
（1）『旧植民地人事総覧』朝鮮編（日本図書センター、一九九七年）昭和四年（一九二九）一月時は京城貯金管理所所長として、同年八月時は、釜山郵便局逓信副事務官として名前が列記されている。いずれも「正六勲五　松島惇」とある。

（2）黒井治徳氏の経歴は、不詳である。『考古学雑誌』目録には、「黒井恕堂」という名前が見える（「朝鮮古代の言語と梵語との関係に就て」一三巻―八号など）。黒井恕堂は、明治三十二年（一八九九）三月十四日、正岡子規の邸宅「子規庵」にて、後に「根岸短歌会」と呼ばれる歌会が開催され、子規、香取秀真、木村芳雨等、六名の中にその名がある（貞光威「伊藤佐千夫人脈考（上）」『聖徳学園岐阜教育大学国語国文学』四、一九八五年、三十三頁）。但し、同一人物であるかは、不詳である。

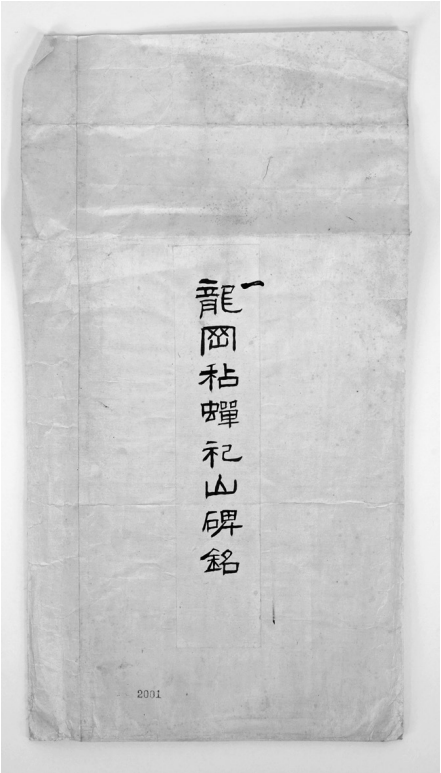
（3）前川公秀『博物館の近代―朝鮮総督府の時代―』（雄山閣、二〇二二年）第五章「小千総督府博物館」参照。

（4）註（三）前川著書一四八頁参照。

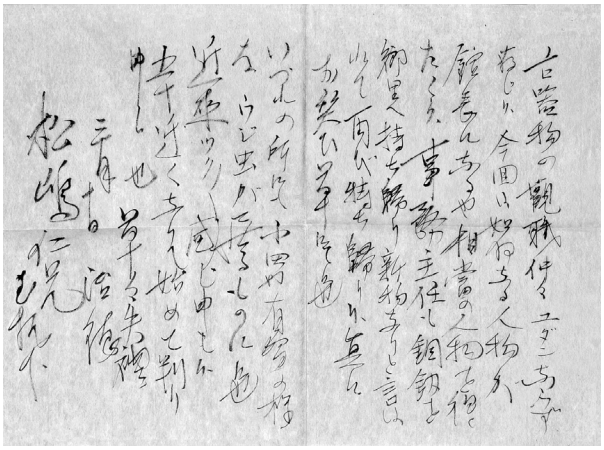
（5）武田幸男「広開土王碑模刻本「観峰館本」の研究」（『観峰館開館二〇周年記念論文集』、二〇一五年）。同論文集には、西谷正「真興王拓境碑をめぐって」（同『朝鮮考古学研究』海鳥社、二〇二二年、第六章第十二節に再録）も掲載されており、併せて参照していただきたい。



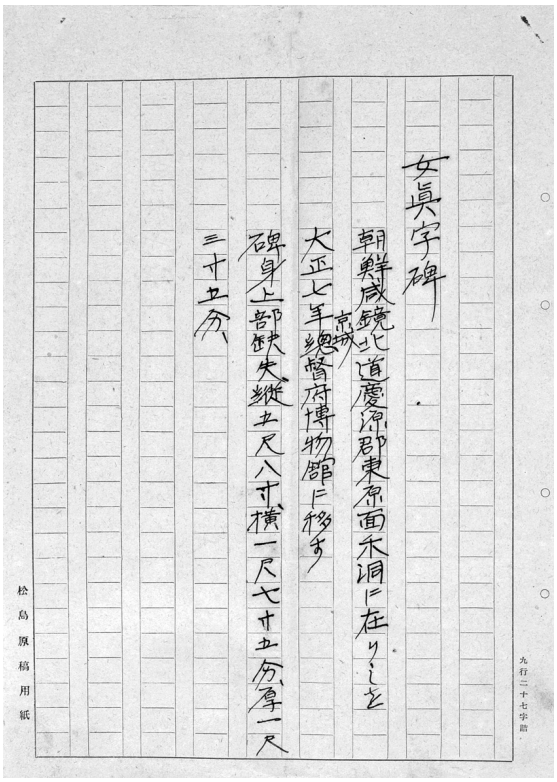
【図版２】松島氏自筆メモ①
（朝鮮総督府逓信官署便箋）



【図版１】拓本封筒
（龍岡秸蟬祈山碑銘）



【図版４】黒井治徳氏書簡（松島氏宛）



【図版３】松島氏自筆メモ②
（松島原稿用紙使用）